

テーマ「人間関係を育てる集団づくりを生かした学級経営
～コミュニケーションスキルの演習を取り入れて～」

講師：長谷川 重和（神戸親和女子大学 准教授）

1 はじめに

(1) ねらい

但馬やまびこの郷で勤務した3年間は、子どもたちと生活をともにしながら「子どもたち一人一人の心をいかに掴むか」ということをいつも考えていた。この思いは、但馬やまびこの郷に勤務したからではなく、学校に勤務している教師もいつも考えていることだと思う。今回の研修会では、様々なスキルを通し「不登校や悩んでいる子どもたちの心を、どのように掴むか」について考えたい。

(2) 講義を通して

人間関係を促進するスキル演習を体験して、「大事なポイントは何なのか」と自分の考えを持ちながら、教育現場で子どもたちと一緒に実践して欲しい。教育者を目指している神戸親和女子大学の学生達も「メンタルフレンド」として但馬やまびこの郷に行き、子どもたちとふれ合う中で、貴重な体験をしている。大学の講義でスキル演習を学ぶだけでなく、メンタルフレンドとして子どもに関わりながら体験的に学んでいる。

(3) 構成的エンカウンターグループ

学級を運営していると、グループ・アプローチを導入してよりよい集団づくりをしたり様々な課題を解決しようとしたりすることがある。文部科学省（以下、文科省と略）の「生徒指導提要」に様々な方法が紹介されているが、「これをやれば、必ずよい方向に展開する」ということにはならない。ポイントは「教師が子どもたちにどういう力をつけていきたい」というねらいのもと学級の実態にそって実践していくことである。それによって子どもが変わり、学級も変わっていく。何より一番変わるのは教師の姿勢だと感じる。この方法はあくまでもスキルであるから、それを何のためにするのかという明確な目的意識を持つことである。

(4) 学級経営

日本の教師は、諸外国の教師と比べて学級経営が上手な教師が多いといわれている。子ども一人一人をよく理解し、子ども同士の人間関係もよく観察している。「学級という集団をどのように導くのか」ということを考え、実践していく技術を持っている。カナダのトロント大学のベック教授は、次のように述べている。「成長し続ける教師は、学級という集団を意識し、よりよい集団づくりができる。これからの教師は、学級経営の視点を意識するようになってくるだろう」

新学習指導要領においても学級経営を意識することになる。確かな学力を身につけるためには、学級経営が上手くいって、間違った答えを出しても笑ったりしない支持的な風土が不可欠である。教科学習において小集団学習が展開することがある。人間関係が円滑な学級は、子ども同士が仲良く、協力し合い、自分の考えを自由に表現できる。友だちと一緒に学ぶことが楽しくて充実している。「安全・安心で学ぶことが楽しい」「みんなと会いたくなる」「早く学校へ行きたい」と思える学級になる。

不登校・いじめ問題の未然防止は、よりよい集団づくり（学級経営）である。9月1日は児童生徒の自殺者数が一番多い日である（文科省の統計より）。長期休みが終わり、次の日に学校へ登校することは大きなストレスであり、プレッシャーとなる。子どもたちが「学校に行きたい」と思える学級作りを普段からしたいものがある。8月の終わりの週は但馬やまびこの郷にとっても大事な週である。2学期スタートを不安に思う子どもたちのウォーミングアップや登校に向けて心のエネルギーをためることを目的として受け入れが始まっている。

2 学級における教育的グループワーク

(1) 指導のポイント

学級経営をする上で児童の実態と課題を上げながら1年間を計画的に実施する。留意点は、何でも実践すれば良いという訳ではない。目的を明確に持ち、子どもたちを支援しながら考えさせていくことである。

(2) エクササイズの種類段階とポイント

ア 感受性を高める

学級経営の柱となるため、年度当初は感覚的なものや感性を磨くもの（マインド握手など）を2～3分の短時間で取り入れていく。曲を流してイメージを広げていくのも工夫の一つ。その時々表情をよく見て状況に合わせて実施し、学級の中でのルール作りとリレーションを形成していく。

イ 自己理解・他者理解を深める

子どもたちの感受性が高まってくると、次の段階では自己理解・他者理解を深めるエクササイズを積極的に取り入れ、自分とは異なった個性や考え方があることについて理解を深めさせる。

ウ 信頼感を高める

子どもたちは、「友達に話をしたら喜んでくれた」という体験をし、「信頼感とはこういうことなのか」「楽しいな」「嬉しいね」という思いになる。人から認め、褒めてもらう機会が少なくなっているからこそ、子どもたちにとって信頼できる存在は非常に大きいものとなる。

エ コミュニケーションのあり方を学ぶ

人間関係を促進させていくためのグループワークを設定し、相手の考えや感情の動きを捉えることの難しさを理解させる。

オ コンセンサスを学ぶ

集団で相談しながら物事を決定していく力を身に付けさせ、やりとりの仕方によって状況が変化することを体験的に理解させる。

3 グループ・アプローチによる実践例

(1) 「ありがとうカード」

「ありがとう」の言葉を交わすシーンを設定し、どのような場面でもあふれかえるように意識していく。教師から子どもたちに「ありがとう」と言えるような関係づくりと、言葉を伝える時の表情が重要である。最高の笑顔を送れるよう「〇〇だと思って下さい」とイメージを高めさせていく。実践していくうちに子どもたちは徐々に慣れていき、てきぱきと実施していくようになる。「今日のテーマはプレゼント交換」と伝えると、既に「朝のプレゼントはこれでいこう」と考えてくる場合もある。

子どもたちの傾向を掴むために用紙をすぐに返却せず、教師が目を通すこともできる。是非、子どもたちのメッセージを読む時間を大事にして欲しい。「あの子は今日こんなことを書いたが、次の日は全然違う内容である」という場合もある。その子らしい内容であれば広めるのもいいし、気になる内容を書いていれば全体の場で紹介することを避け、個別で対応する。

このエクササイズは感受性を高めることをねらいとし（4月当初に実施、2学期開始の9月からでも遅くない）、状況を見ながら目的に応じてアレンジを加える。

ア 「ありがとうカード」のメッセージをフリートークで実施

自由に歩き回る場面を設定する。例えば丸い円状に並び、A君は対角線を目指して歩き、Bさんは円の中心を目指して歩く。そうした順番に歩き回る場面を設定し、偶然出会った位置でフリートークすることで、色々な人と会話する機会ができる。

イ 出会った時に様々な表情を作ることの意識

お互いに顔を見ながらすれ違う場面を設定し「ちょっと怖かったね」とコメントする。次に「今度は怖い顔をせず、すれ違う時にニコツとしてみよう」と言って実施する。「良い表情ですね。目が会話しているね」と付け加え、自分の表情を意識してみる。

ウ 嫌と感じる表情の体験

子どもたちが「このような表情をすれば、相手は嫌と感じる」と受け止めて、気をつけようとすればよい。ただ、悪意を持って使用すると円滑な人間関係に逆効果である。教師は、繊細な感覚と言葉が要求される。「嫌な気持ちになるので、このような表情はいけない。ニコツすると気持ちよい」と感じさせることが重要である。コミュニケーションの取り方の基礎となる内容であるため、低学年のうちや道徳の授業の中でエクササイズを通して体験することにより、大切なポイントを客観的に判らせていくようにすることが大切である。

(2) 「トントントーク」

ア 隣同士でジャンケンし、勝った人はトントンしてもらえ。負けた人は勝った人の背後から「さすが強いね」と、力を考えながら凝ってそうだなと思う箇所を叩く。更に叩いている間、話（例えば夏休みに一番楽しかったこと）を続ける。叩かれている人は受容しながら話を聞く。

イ トントンした人はどんな気持ちになったか用紙に箇条書きで記入する。叩かれた人は話をしてもらってどんな気持ちになったかを記入する。

ウ 「気持ちよかった人は手を上げて下さい」「それはトントンした人が話をよく考えたからです。『こうしたら気持ちよいのでは?』と考えてくれたからです。ありがとうございますという気持ちになりましたか?」と伝える。

エ 交代

オ 「相手にトントンしてもらったので、何か伝えたいことがありますね?」「その思いを『〇〇さんありがとう・・・』と会話するように書いて下さい」と伝える。

このエクササイズは鉛筆対談を取り入れると面白い。交換したメッセージの後に嬉しかったという気持ちが焦点化されよりよく伝わる。文章だけで伝えることと、気持ちや表情を加えて伝えることに違いがあることが体験を通して分かる。また、心を互いに分かち合うことで様々なことに気付いていく契機にもなる。

(3) スクイグル

なかなか喋らない子どもに対して行う心理的なアプローチ法。子どもと一緒に時間や空間を共有し、相手の思いを感じ取りながら絵に表していく。全然判らない場合は、ぐちゃぐちゃと書くこともOK。最後にはまとまりのある物になったりする。仕上がった絵は残しておくことで、後日、子どもと会話する話題が増えていく。

(4) アドジャン

集団（4～6人組）で実施。アドジャンシートに質問事項があるが、子どもたちに考えさせる主体的な運用でもよい。テンポよく展開してたくさん質問に答えさせ、他者理解へと繋いでいく。答えたくない子がいる場合、教師が全て決めず「パスは何回までOK?こんな時どうする?」とルールを相談して決めさせてもよい。

教師は、それぞれのエクササイズで子どもの実態に合ったアレンジを加えながら実施していくことになる。計画的にエクササイズを積み重ねていくと、子どもとの間に様々なチャンネルが増え、日々成長していく子どもたちをより客観的に理解するようになる。エクササイズの終わりにフィードバックで「こんな〇〇を体験し、〇〇に気づいたことは素晴らしいことです」と伝える場面がある。“先生メッセージ”が、エクササイズという体験を通して子どもの心に伝わる。その体験後、ポジティブな言動が、学校生活の中でじわじわと広がっていくことがある。教師はそれを見逃さず、子どもたちを認め、褒めることである。コミュニケーションスキルを取り入れることで、「友だちとの学びが楽しい学級」「教室は居場所、安心の空間」となることを期待している。

本日はたくさんエクササイズを体験していただいた。大事なポイントは何か少しでも分かっていたら幸いです。「教育は実践有るのみ」頭では分かっている、実際に経験しなくては分からないことはたくさんあります。“Learning by doing (なす事によって学ぶ)”というデューイの言葉に学ぶところです。

季節の変わり目を迎えます。先生方には、十分健康に留意され、目の前の子どもたちのために頑張ってくださいと思います。